

## 「タイ・フィールド調査 2016 参加報告書」

京都大学大学院

経済学研究科修士1年 竹下 伸一

①学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分どのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）：

B01 では AEC 発足後のタイの新たな経済成長戦略の説明を受けたが、これは良いタイミングであった。付加価値の高い産業（ロボット、エレクトロニクス、バイオ、など5つの柱）へ産業構造の転換を目指す。そして労働集約的な産業は近隣国に移行して低コストを活用すると共に、タイ企業の近隣諸国などへの投資進出も促進する方針ということだった。

チェンマイ大学の Chayan 教授による講義の中で、タイを巡る現在までの政治・経済の拡大してきた動きの中で CSO 活動の消滅や現在の軍政下で「言論の自由」が無い経緯について厳しい説明を受けた。ASEAN の3本のピラーには「環境」が欠けているが故に環境問題が解決に至っていない事例の指摘を重く受け止めた。またメコン川上流で中国が計画しているダム建設に対して、漁業や全域の環境への悪影響や単なる鉱物資源の掘削開発の齎す負の影響などを巡る議論を通じ、現状を良く理解する事ができ、これらの課題に対する研究者としての立ち位置に関しても良い考察を得た。

チェンマイ市にある（株）フジクラ・エレクトロニクスの訪問で、ASEAN 地域で日本企業がそのサプライチェーン構築に努力されている事が理解できたのは貴重であった。また現地企業との協業体制や技術移転なども進んでいる事実や、日本企業の現地での地域社会貢献活動内容は今後の研究論文の作成に役立つと思う。

タマサート大学での BioThai Foundation の Witoon 氏の講演 “Thai Conglomerate and Food Chain” ではかつて日本の食品メーカーに勤務しタイ工場も知る身であるので、タイが現在抱える「食品の安全性にまだ課題が多い現実」の指摘があり、食品産業での現状を的確に認識できた。これに対しては日本による技術支援の方策の可能性も考えてみたい。加えてタイの食品独占企業（CP 社）がその独占力を使い食品のバリューチェーン全般のみならず政治や社会に対して数多くの専横的な行動を取っていることへの厳しい批判とそれに対抗していく農民の小さな運動を紹介され、持続的な農業成長には Inclusive な観点の必要性を強く感じた。かつての20世紀中頃における中南米におけるバナナ・リパブリックの再現を想起し、新興国における政治・経済体制の民主的なあるべき姿を考えさせられた。

FAO 訪問においては、食料安全保障に向けた取組みと国連の新 SDG（17 Sustainable Development Goals）との関連やその内容が明確になった。自身も APEC の PPFS（Policy Partnership for Food Security）フォーラムでの民間代表の一員として3年間参加した経験もあり、ASEAN 地域での FAO 及び CSO を含む関係団体の緊密な協働活動がより一層重要になってきた事を再確認できた。

2人のスカラーによる対談は今回の研修の中で非常に印象深いものであった。これまで長年に亘り社会活動に従事してきてタイ国内外で尊敬を集めている Sivaraksa 氏（84歳、Thai NGO “Sathirakoses-Nagapradeepa Foundation”）は、彼の長年の経験から、インテリが果たす役割を「社会を改善・進化させる」と明確に規定し、若いスカラー候補達の奮起を促すと共に、「一生の良い友達（苦言を呈してくれる者）」を持つ重要性を説いた。私も若き日を思い出し感無量で、現在の軍政下で抑圧されていても活発に、しかし静かに抵抗運動を進め

ている姿には改めて感銘を受けた。彼の著書「Buddhism, Monarchy and Democracy」を購入したので、彼の行動を支える思想や理念を理解してみたい。Thanet 教授は 19 世紀末のアジアで欧州勢による植民地化を避け独立を保った日本の明治維新とタイの近代化の歴史を振り返り今後の民主化への展望を語ったが、現状の政治体制下で抱える苦悩には同情せざるを得ない。

Prinya 教授によるタマサート大学の Campus tour は上記対談を聞いた後であっただけに、タマサート大学教員・学生の民主化を目指す過去の激しく血塗られた抵抗の長い歴史を記念する数々のモニュメント巡りで知り得た大学の伝統には感銘を受けた。タイ王国を支える人材を育成するチュラロンコーン大学と対照的な立ち位置は京都大学と類似するかと思う。

タマサート大学での Workshop で卒論の研究プランをプレゼンして、更なる改善に資する有益なアドバイス・コメントを現地の学友達から得ることができたのは貴重な経験であり、今後彼らと緊密に情報交換を行い卒論内容の質の向上に役立てたい。

Maha-Sawat Canal の Agro Tourism Service Center では、数年前の大洪水の経験や地域の発展について、センター長から説明を受けた。かつては農村ではあったもののバンコク近郊にあるため周りにマンション群が迫っている。訪問したあるフルーツ栽培農園は現在 3 億円の市場価値があるとの事であったが、女性オーナーは農業を継続する意思であった。Center 施設内では、基本的に有機農法でフルーツ栽培、花卉栽培などを行い多くの観光客を集めている。Center 内の施設をタマサート大学の学友と一緒に 10 人乗り小型モーターボート 4 艘に分乗して巡った。途中で我々の乗ったボートが流れてきたバナナの木や大型の水草に囲まれ立往生した。その時に他のボートの学友と共同で揺れるボートで懸命に除去の作業を行い無事に進めた時には仲間の一体感を強く感じて良い思い出になった。帰りに立ち寄った近くのショッピングモールのガソリンスタンドや店舗をセンター長が経営している事を知ったのには自由経済の浸透・拡大の素早さに驚いた。

今回の派遣に参加して、海外のスカラーや学生との議論を通じて現地理解に加え経済状況や課題への理解が深まった経験を踏まえ、次の海外留学にも積極的に参加していきたい気持ちが改めて高まった。ASEAN は持続的経済成長に向けたダイナミックで新たな時代に入った感じを受けたが、依然として多くの課題も抱えている現状を直視すべき研究課題もたくさんあるのも、研究者にとっては大変興味深い地域である事を実感できた。

## ②海外での経験：

最近数年間は ASEAN 諸国を訪問する機会がなかったが、今回の派遣で 2015 年末に発足した AEC (ASEAN Economic Community) の新たな経済発展への息吹を現地で感じ、専門家による講演により現実の動きに対する研究の心構えなどのヒントを得る事ができたのは有益であった。AEC 内の各新興エコノミーの持続的経済発展の政策や成功事例の研究を更に進めていく研究計画に確信を得た。

また日本ではなかなか知る事が少ない現地の NGO・NPO などや国際機関 (FAO と UNIDO) の担当者との会合、彼らの活発な活動の現状と課題を改めて理解を深める事ができるのは、今回のような派遣に参加する機会でなければならず、このようなプログラムは大変貴重であり彼らとの議論を今後の研究で活用していきたい。

やはり経済活動の現場を実際に見て感じそして研究関係者との直接の会話・議論を行う事を通じて多様で多角的な国際理解の視点を養う上で非常に大切である事を改めて認識できたので、ASEAN 現地に来て現地スカラー等との意見交換の機会を今後はますます増やしていきたい。

チェンマイでは最近中国でヒットした映画がチェンマイ大学内で撮影された影響で、中国からの旅行者が激増し我々の宿泊したホテルでも多数滞り朝食時は大変賑やかであった。これを反映して中国人の留学生も増えて

インバウンドの影響分析を研究課題に取りあげていたが、京都市と同様にプラスとマイナスが発生している。このような生の経験を通じて経済・政治などの息吹を感じるのは貴重な経験である。

③プログラム内容：

9月19日 タイ・チェンマイ市に到着

9月20日 ・タイ Board of Investment 訪問  
・有機栽培農園視察

9月21日 チェンマイ大学

・講演 Dr. Chayan, Director of The Regional Center for Social Science and Sustainable Development  
・経済学部にて Workshop  
・日本研究学部 訪問

9月22日 (株)フジクラ・エレクトロニクス社 訪問  
バンコク市へ移動

9月23日 タマサート大学

・オリエンテーション  
・講演: “Thai Conglomerate and the Monopoly of Supply Chain”, Ajarn Witoon Lienchamroon, Director, BioThai Foundation  
・FAO 訪問 “Food Security in Asia”, 講演及び意見交換  
・UNIDO 訪問 “アジア中進国における Trade-capacity building と Energy & environment 支援”

9月24日 タマサート大学

・対談: “The Role of Intellectuals in Modernization amid Cultural Diversity and Differences”  
S.Sivaraksa, Scholar, Activist & Author, Prof. Dr. Thanet Aphornsuvan, PBIC  
・Campus Tour by Ajarn Prinya Thaewanarumitkul  
・Joint Int’l Students Workshop, “Diversity in Sustainable Development in Asia”  
・Closing ceremony

9月25日 視察 Agro Tourism Service Center, Maha Sawat Canal

9月26日 視察 Dhevasathan/Chakrapong Mosque, 講演 Ajarn Songyote Waeohongsa  
Santa Cruz Church

9月27日 ・Department of Children and Youth, Ministry of Social development and Human Security 訪問  
・Department of International Organizations, Ministry of Foreign Affairs 訪問

9月28日 帰国

④進路への影響：

ASEAN 諸国の企業活動はますます活発化してくる事を強く感じたので、新興国の多くの起業家精神溢れる企業の事業発展を研究する卒論テーマは時期に合っているかと感じた。卒論では、また、ASEAN 企業への日本企業による知識移転などを通じたコラボレーションの可能性も分析し、ベストの仕組の構築を支援する可能性も強く感じた。この事例分析を通じて農業産業全般に展開・敷衍して ASEAN 諸国が中進国の罫から脱却すべき持続的経済成長へのビジネス・モデルへと展開していきたい。

修士論文を早期に作成し、引き続き博士課程へ進学し ASEAN 地域の持続的経済発展を研究テーマとして取り上げていきたい。